

「苦手だ…。」そんな生徒も少なくないはず。それでも類型に関係なく必要な教科、それが英語です。実は大学だけが英語を意識しているわけではありません。大学の先、即ち産業界（企業や社会）が英語の必要性を真剣に考え始めました。そこで今回は高校生にとっての進路設計における英語との向き合い方について考えていきます。

5. 英語との向き合い方

分類される3つの型

大学の多様化により大学が英語という言葉はどう扱うかも変化しました。外国語系大学では留学やインターンなどの間口を広げ、数多くの海外の大学との連携をしています。他大学でも英語の履修は当たり前。コロナ禍であるものの、依然として重要視される英語。ある大学によると、現在の大学は大きく次の3つの型に分類されます。

1. 高度な研究大学型 … 英語で研究できる
2. 職業直結の専修学校型 … 英語で仕事ができる
3. レジャーランド型 … 英語で〇〇ができる（日常会話や、海外旅行の手続きなど）

当然ながら優劣はありません。ただ、レジャーランド型の授業を展開する大学で、仕事に生きる英語を身に付けることが——2の大学と比べて——難しいのは確かです。避けて通れない英語をどう学ぶのか。今、大学選びの大きな要素になっています。

A2 基準とは…

「A2 基準」という言葉をご存じでしょうか。これは、^{セフアール}CEFR（外国語の能力を「何ができるか」でレベル分けした国際基準）の6段階中の1つで、多くの大学が指標とする英語力です。A1が基礎、A2, B1, B2, C1とレベルが上がってゆき、C2が最上です。A2の内容は以下のとおりです。

A2 …ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる
(ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構より)

うーむ、難しいですね。簡単に言うと英検の準2級合格程度、つまり高校中級レベルです。ここで大切なのはA2という基準を各大学がどう捉えているか、です。なぜかと言うと、大学が自身の研究や学びをどう位置付けるかによって基準の在り方が変わるためです。中高で学んだ学力を生かしていく「入口」としてA2を位置付けているか、大学院や専門、職業へ結びつける「出口」として位置付けているかでカリキュラムが変わります。大学がA2の学生の英語力をどう伸ばしていくのか。各大学がディプロマ・ポリシーとして掲げるレベルにどのようなプロセスで取り組んでいるのか。そうした各大学の「英語への姿勢」は是非知っておきたいですね。

今や大学と英語は切っても切れない関係にあります。その大学の英語に対する授業の方針(型)や、A2基準の英語力をどう捉えているか、把握しておくことが非常に大切です。後悔しない選択をするためにも1歩踏み込んだところまで調べてみてください。